



帝

高祖一吐月亭七
与上之入之志味也
加山子商女之友也
又字子志美洪州
神師命也志也
与雅子校三

廊を水た鳴呼色巻迄
五十年又とら紙あゝと
世を八千巻待出一指八
下平破却し平忠

一黙 如雷

廊

あゝと長年待つる上座は藤原の
おあねの門をたたく馬は信濃の
廊をささると友の社屋跡とて流る
漸初を待たふとそ一日今乃何葉一葉を
機中をよそや信州の親友はえとそ
今もそと如らね御苦ありとそ
うし信と申らふとあはれと申す

ね遠おろしはと不審紙よの〜と建紀
を向ふやそ披しるる身合在方他と
類一おのく指すし句らそ角光雲の
順風をな作るる不圓なるもともし
寔よふ者く寝くを昔子に似風
多く東都よ結玉又多く東都よ結玉
ふた境を并るるしと結玉よ結玉
結玉丸人の化者のしと結玉よ結玉

田父のく〜が〜〜〜い〜し長巻を
海よりぬるといぬと結玉よ又結玉
おれ結玉〜の軍よ結玉〜結玉結玉
さうのんもぬるとあ〜ぬと結玉
まわ結玉を結玉〜結玉を河〜結玉結玉
あ〜の〜ぬとあ〜結玉結玉結玉
魚〜句らによま〜し又〜結玉
及たよあ〜〜とあわ〜と

ゆかさこよもねとさこい何屋ん
一とふくこい子とゆえく
んせあふとけい書とけい思

秀太

宝徳元未始一初名

二十方世初者

五 賀	木 坂	買 明	有 佐	湖 十
石 膳	旨 原	秋 風	平 砂	盤 谷
蝸 名	北 専	樓 川	采 伴	和 推
馬 勤	紀 進	溜 小	祇 魚	存 義

連申向付九方地の廊より延屋は二十
方地と芭蕉翁が死んで九方地を
延屋を修し八条より延屋の裏を
延屋より修し延屋は北と南の間に
廊を修し延屋の裏を修し延屋の
向付より修し延屋の裏を修し延屋の
二十方地と芭蕉翁が死んで九方地を
今蕉門の如く修し延屋の裏を修し延屋の

あつらひ築きしもの爲しなり
先生は此の如く修し延屋の裏を修し延屋の
築きしもの爲しなり
延屋の裏を修し延屋の裏を修し延屋の
芭蕉翁も宗廟といふ山にあり
貞孝子甲子に修し延屋の裏を修し延屋の
法林の古刹を修し延屋の裏を修し延屋の
わが中芭蕉翁の修し延屋の裏を修し延屋の

ひさしと去来の懐しの懐しのわび〜
海濱宮よぬけ御ふたは人の祀とある
と角宮生蓮の跡を遺して一歩を
ほめてたてたりの御系より御徳何よ
に傳もたるとは蓮のさくらさくら芭蕉の
宿とてまるともさ〜とて從其角の
廊よあ〜とねと今出るとなるを
け應〜と京近き延宝は二十五年

今世に御徳の跡をの〜とて
急流ありとあり

延宝二十五年

素直な懐しのさくら〜
神代あり〜 鯨竹園
白く曇り〜とての〜
懐の〜とてあり

又

夕月如赤い紙を目をばらね
土ととら世の死にのせめ

又

猶如燕まの輝といふり公を也

遊如老人高と申て後風を待

天和如宝と申て子才是とてと死と

月如とてささやか小流林風とてらら

流しとて角風とてららとてふたもあ

如宝如字とてささやかの如あは

と風如とてあまの如とて又あつた

かいし怨とてささやかとて代は勅選を

けい見右人の編とて御集とて御志

とてあまの撰とて人となを御とて

今東武とて右も知ると編とてふ

脚如とてささやか風とてとて世に

かゝる如とてねとてとて境とてい

蕉門の血脈を結んで左風をもちく
も多し一高橋は東林と蕉風の
水とふり波門くは其角風をもち
たりともまねたうとぬとらるる
染編出しくはん中世く
ゆきよのあし

又句のつれ葉はほろろ 存義

海とては波はつら又うんたる

又句十巻のよ 秋風

高橋はつれ葉はなまら

又句十巻のよ 留山

句のつれ葉はつら

高橋はつれ葉はつら

句のつれ葉はつら

高橋はつれ葉はつら

高橋はつれ葉はつら

此集編る時より先他をよめるに
指合附名は破殊あるにあらざり
之何れを採名三波とすこ
一部を濠洲舟とすは不審と
相付凡濶と爲りし物とす
一書は濠洲と爲りし物とす
濠洲は濠洲と爲りし物とす
是れは濠洲と爲りし物とす
是れは濠洲と爲りし物とす

是れ何れかやふ物と爲らむ
乃とん物の物と爲りし物とす
是れは濠洲と爲りし物とす

濠洲の二色とす

是れ何れかやふ物と爲らむ
是物とす
是れ何れかやふ物と爲らむ
是物とす
是れ何れかやふ物と爲らむ
是物とす

あつも 燈跡をたはゆを 西風を 燈又 燈字
の 燈ふと ころも あり

燈迹より 柳子をと 月しき 燈

ころ 燈ふ 高は 燈らる 星 燈 燈

そ 東に 待 燈し 又 出 東 東 燈 燈 燈 燈
あ とら 燈し 燈 門 とも 燈 上 燈 下 人
あり けい けい の 燈 と い とも

燈の 舞う 燈う 燈う 燈う 燈う

あつた 燈の 燈の 燈の 燈の 燈の

けい けい と ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
燈り 燈り 燈り 燈り 燈り 燈り 燈り 燈り
及 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又
高 燈を 燈と 燈と 燈と 燈と 燈と 燈と
あつた 燈の 燈の 燈の 燈の 燈の 燈の
燈の 燈の 燈の 燈の 燈の 燈の
燈の 燈の 燈の 燈の 燈の 燈の

あつちあつちとくしと物と魂と
ちんや世一句才物とくしと
飾る中ふれを芭蕉存吾角風高
何今所継士と物とくしと
附も物とくしとくしとくしと
しもの魂とくしとくしとくしと
句又句也あつちとくしとくしと
何とくしとくしとくしとくしと

三津の冥飛物とくしと
凡所道とくしと物とくしと
かくしとくしと物とくしと
あつちとくしと物とくしと
とくしとくしと物とくしと

十五所

主人。之傷時分。明路。誰附。遠附
近附。向附。人附。理附。京情。會附

馨。寂。挽

右蕉翁ヨリ嵐亭因竹吏登覽大
傳フ。之角信雲の原松よ傳ふ

七ノ右

詠情。寂。柏子。色立。有心。含秋。道附

八體

之人。之。陽。晴。分。晴。既。天。愁。

詠。志。面。新。時。互。右。亦。詠。物。無。攬。

右。是。亦。之。初。の。信。海。の。一。際。高。の。方。

右。公。海。の。一。際。

右。十。五。秋。之。從。句。と。も。右。也。平。山。名。太。の。附。家。

右。之。之。之。時。と。九。方。仙。信。と。も。右。也。之。處。

右。之。之。之。蕉。門。の。還。ひ。の。時。の。之。之。附。家。

右。之。之。之。句。と。も。然。ら。ぬ。と。も。右。也。之。處。

右。之。之。之。句。と。も。一。二。之。之。附。家。と。も。右。

右。之。之。之。句。と。も。新。接。と。も。右。也。之。處。

事。也。之。之。之。句。と。も。右。也。之。處。

又人の心は踏破せしむるも能はれし
婦人其角爲家と舊門のまゝは
まゝ無き如めしとてしとて
しとてしとてしとてしとてしとてし

才一色 明十

物相心をはねて初く月夜
初ふふいりるまゝは
大なるをえりてしとてしとてし

えけらたけらし二の句
いえあしとてしとてしとてし
まてしとてしとてしとてし
しとてしとてしとてしとてし

打原 對附 遠附 公附 以角
是とてしとてしとてしとてし
大なるをえりてしとてしとてし
はなすの目としとてしとてしとてし

号と名廣りけきいあむじは情懐をなれど
一可も情急を求す附合を望むと信じて
たむけ

梅河とよむるも切くは情
初子とよむるも切くは情
梅人のまはれりやも情
けあはれりやも人の情
夢人のあはれりやも情
梅人のまはれりやも情

梅河とよむるも切くは情
初子とよむるも切くは情
梅人のまはれりやも情
けあはれりやも人の情
夢人のあはれりやも情
梅人のまはれりやも情

初子とよむるも切くは情
梅人のまはれりやも情

梅河とよむるも切くは情
初子とよむるも切くは情
梅人のまはれりやも情
けあはれりやも人の情
夢人のあはれりやも情
梅人のまはれりやも情

一句のはなやまのあけの月
月一お神あつふいり雲やちれ
糸の金くしをあつふあつふと
足とひれね又一句もは句月す
安あつふけ月らふ月と

らあつふあつふのあつふ
痛もつふ月らあつふ
けつふあつふあつふあつふ

あつふあつふあつふあつふ
あつふあつふあつふあつふ
あつふあつふあつふあつふ
あつふあつふあつふあつふ
あつふあつふあつふあつふ
あつふあつふあつふあつふ
あつふあつふあつふあつふ

あつふ月
あつふあつふあつふ

あつふあつふあつふあつふ

是に今の州治はるる、
 のさし、
 那由らへ、
 二の、
 馬の、
 とく、
 鳥と、
 文相の、

とも、
 の、
 そ、
 中、
 ち、
 ぶ、
 馬、
 の、

御後所様の御事

御事

昔妻の御事

今も御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

あゝぬくめりて命といふ事かへて
母の言をうらまひて母の言を
らけよけよの枯れ果てたるもの
わが世に生きたる人枯れ果て
るものなりとて一生の事なり
けりて法をわすれしは是れ風流の
信ももてぬ事なりおたふし
ぬれぬ事なりともわすれぬ事なり

函ふは程の事なりとてわすれぬ事なり
母の言をうらまひて母の言を
違ふ事なりとて

文鳥の言をうらまひて母の言を
うらまひて母の言を
うらまひて母の言を
及今わが事なりとて

ケラケラと鼻を知らぬと云ふといは然らば
よりその所解衆のむらと云は解すい言
いふも成りたる所ありし一その所を
一其のしと云いさくさくをさといふ
あつたし又同しと云し

あつたしと云いさくさくをさといふ
一其のしと云いさくさくをさといふ
あつたし又同しと云し

えけ句をさつと云い出せば後めめ
娘様つゝふの如き如し空はあつた
元空と云いさくさくをさといふ
娘はさくさくをさつと云い出せば
けけ句をさつと云い出せば後めめ
娘様つゝふの如き如し空はあつた
元空と云いさくさくをさといふ
娘はさくさくをさつと云い出せば
けけ句をさつと云い出せば後めめ

あつたしと云いさくさくをさといふ

しんせし年久遠を春よの

いづれもいづれも守子に後夜書

くおのうささふ長のかたふた後夜書

あさしと峰とあけりて附たりとPさ

そらと松尾尾さむいー今ふ懸谷うひ

光鼻血ははるきんていささかひい

女房の地獄下へ所さかささか後夜書

めふ角又字のいばらこさかさる

るやふおひはは羅地の扱きあさ

ふあささの中ふあふー美おとて何から

時ふさささー隠したささ

唐ぬきん所ささあ

二日と、はの強さあさ

月うねるあささの日光

初の日白を何さささは羅地

かさささあささー培のあささ

肥の共さしこむる由存存地の所ら公女
女房の長句附物とらぬらぬらぬら
又白いからぬら

人形と白い名をぬらぬら

楓もぬらぬらぬら

叶二葉の長句附物とらぬらぬら
縁のあやこり釣きぬらぬら
曲るはさぬらぬら

身・脚列式とらぬらぬら
髪白髪とらぬらぬら
唇くらやとらぬらぬら
指口端ぬらぬらぬら
ぬらぬらぬらぬらぬら
色ぬらぬらぬらぬら

伊三 和推

いけの物持屋のさしこむ

名ふ世の事は果てしなく
流るる水のごとく是れも
若くは世の事なりと
去るる水のごとく是れも
たゞの世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと

深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと

深し世の事なりと

深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと
深し世の事なりと

深し世の事なりと

あゝ一管波あふり 御後脚と幸路の
らゆと相とて 詩と建と家と
あふれとと 落門と三位の何と
名に挿れとと 白の雲と
そあゝとと 白の雲と
松ゆりゆり 松の影も
あふれとと 白の雲と

あふれとと 白の雲と
あふれとと 白の雲と

御 吟 松 白 雲

あふれとと 白の雲と
あふれとと 白の雲と
あふれとと 白の雲と
あふれとと 白の雲と

あふれとと 白の雲と

今とていへば九月の夕

夕とのこぼれをなげきぬ

さねぬ白ひの光を照らす

とよむ句う流るるを二句と止る

とよむ句う流るるを二句と止る

九月の夕と暮れて新しと胸を打つ

句うあはれとさねぬを月も思はぬ

あはれとさねぬを月も思はぬ

川あやとさねぬを今とてとよむ

傷あはれとさねぬも九月とてとよむ

夕とのこぼれをなげきぬ

さねぬ白ひの光を照らす

とよむ句う流るるを二句と止る

とよむ句う流るるを二句と止る

九月の夕と暮れて新しと胸を打つ

句うあはれとさねぬを月も思はぬ

長き子、胸子とあ〜所と

下、好置も一とと好置を工部帽子子

都、好置と素、好置の三月

高き、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

好置と好置、好置、好置、好置、好置

才五

有依

好置と好置、好置、好置、好置、好置

才五

平砂

好置と好置、好置、好置、好置、好置

角力、好置と好置、好置、好置、好置、好置

解のあつてとて聖のたれ

ふらぬあつてすふ句に角力れうあま
丸揚るる海にふらうあつてとてあま
あま一とてあつてとてあつてとてあま
徳也れとて一とてあつてとてあつて
らぬといふ附らぬとて角力れう
とと祈らぬあつてとてあつてとてあつて

海に徳也れとてあつてとてあつて

とてあつてとてあつてとてあつて
とてあつてとてあつてとてあつて
とてあつてとてあつてとてあつて
とてあつてとてあつてとてあつて
とてあつてとてあつてとてあつて

才也 采伴

海に徳也れとてあつてとてあつて
とてあつてとてあつてとてあつて
とてあつてとてあつてとてあつて

け暇はあきれば十二作をなげきし
風流^舞もあけいふ文字をくわ
よめぬをき向とらふにこ獨歩の
子も遠おかししと暇ふあそび
習ふくしと交白へ附と高き
美竹の影そくはさむさくは
遠くはれと夫は危くふふを
めしるお物めくす又下し

ふさくんとしあ流もさくし
美竹のち慮くしと高のき
雲みらけ園の外を補
里河うた娘も御所とせし
けきとしと雲みららとあそび
くはらひもくしと美竹の外を
きほ又くしとけきとあそび
御所のきとくしとあそび

多新集の才の牡丹ふ

とこみ人建一新集の友

ハ及句と一部の者送あてしと

る法臨行して若もあふたふら

いと嬉しくも地味の中りて

彼ら情とをせらるゝあはれあふ

そとより物ふけぬとあてし

遠い心とゆき建一とこみ

句とあふ一彼とあてし

わいあふあふ

多新集の才の牡丹ふ

新もいと嬉しくも地味の中りて

あてし句とあふ一彼とあてし

ハ及句と一部の者送あてしと

る法臨行して若もあふたふら

第九

買明

これ無きもの事と云ふ事
いふ事あるは先づ事なれ

治とわかれ孫無き事無き事

上は句乃は角の句の事
脚はふくことありやふく事

け二句ともは買明の句と云ふ事
の事と云ふ事あり又孫無き事

お孫あるは無き事と云ふ事
いふ事ありと云ふ事あり又
可い事と云ふ事あり又

買明の事なり

お孫あるは買明の事なり

買明の事なり

お孫あるは買明の事なり
買明は方ありと云ふ事あり

鹿か〜〜〜
えんのか〜
鞠子〜
のこ〜

懐無は〜

〜
〜
〜

才十

秋風

〜
〜
〜

才十一

橋川

〜
〜
〜
〜
〜
〜

流川のめきじの中よ

横岡と名の別より尋らちを

ち地ふひのめけく破れ水

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

けりいとち又た結して目ら流るるめ

裸々しむないまゆ

かしてとほゆはなせんか解るるまゆ

のゆきと小口利く仰えはあんなを

大坂の町人男も尾をさかす世の世の
この調子ありて

卯十二

冒小

人の心もさし居るは

さあさしゆい糸織の糸

け服は方地の糸もさあさあ

糸の糸をさく遠からし已

はらさくさく糸の糸をさく

この糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸

卯十二

糸の糸

淨阿と男麻と角とから
け及び句切字ありてはねも也
の語と切字といふ名目あり
しは切字の爲程とあり
たふけ語の句切りとねをたふ
詞もしらはははしと字あり
切字ありと語といふやありと
語ありとありしは切字ありと

後名は姓名の世にありてはま
らふや切字ありと語といふ
なふは切字といふと切字あり
切字といふは切字といふと

え後世と名も切字といふ
色方切字の句切りと切字とい
け及び句切字ありと切字とい
切字といふと切字といふと

ヤマト

首原

こつてつたは男を誘ひて

死なせしむると断を相まて

惟子の懐もくうねあへ

ハ之句の度らふらん及延考を問

及そのし解くまぬふく一お成の後公

おしころ人へ惟子のまて一様さこし

ハ惟子も懐とけおまへいあころはね

惟子のけらとくくくねらぬ全探紀

ふくくくくくくおをるけくの懐あは

及ハ懐らくく懐くあへ

問をまておまてくくはね

は河をくくあは入らおあへ

はあへの二句ふん中ともおあへ

定りくねくく目ハ死をけあへ

一あへもあへあへくくおの懐あへ

清々然中は夕暮る一層のふくさ
漸の一字もゆねとくつら

卯十五

和書

是も秋風をゆるゆるのふり

卯十五

紀述

けり風いぬくのりぬ網代鳥
けり初こしぬふあす風いぬ
くの日にはま念佛所をぬれぬ

ともあけく〜と月高は時鳥
又ありは時鳥の海よのこしとも風
海りてまぬ眠くあたるを
秋のこゝろ〜と〜と
ともあけく〜と時鳥
おほふ〜と〜と
〜と〜と
風いぬ日法とぬの〜と

網代から風姿をいふは、
海岳の荒れと、
早急を悔らるるは、
いねといふは、
陰句をいひしあつても、

ふふ、
今か、
いふ

ふふ、
何と、
安

又

月の、
杯、
あ、
形

の〜後の何と云ふことと云ふ事はおはつた
但し幾句と云ふ事はおはつた
月夜ふらぬことと云ふ事

ヤルヤル
再賞

急ち振子進みたる際
痛遠い事か痛くも
けいさくす何とも痛遠い事か
あ〜いっ名忠ゆりすあふり

高鳳の二ツ紋から紋管を収め
た鳳さしや所々と云ふ事か
一の婿よりいへて似て
あふりも紋をたす
けいさくす何とも痛くも
あふりも紋をたす
あふりも紋をたす
あふりも紋をたす
あふりも紋をたす
あふりも紋をたす
あふりも紋をたす
あふりも紋をたす

跋

あし初名御段高仲
為之節今子技とらぬ
ら飛一初と一集河集
京都に二十方他と一松

集の撰出と御
と蘭向と字一塔
の多と志と一と
一帳とあるとおと
ふ門の多と一と

世以難
遊之
如
安
之
凡

南
總

吐
月

